

舍利

世阿弥作

前

ワキ

出雲の僧

狂言

能力

シテ 里人

後

ツレ

韋馱天

シテ

足疾鬼

季は 地は

春 京都

「是は出雲の国三保の関より出でたる僧にて候。我

いまだ都を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち洛陽の仏

閣一見せばやと思ひ候。

道行

「朝立つや。空行く雲の三保の関。く。心は留まる故郷の。跡の名残も重なりて。都に早く着きにけり。く。

詞
「日を重ねて急ぎ候ふ間。程なく都に着きて候。まづ承り及びたる東山泉涌寺へ参り。大唐より渡されたる十六羅漢。又仏舍利をも拝み申さばやと存じ候。

「是なる寺を泉涌寺と申すげに候。寺中の人委しく案内をも尋ねばやと思ひ候。如何に誰か御入り候。

狂言
「何事を御尋ね候ふぞ。

ワキ
「是は遙かの田舎より上りたる僧にて候。当寺の御事を承り及び遙々参りて候。大唐より渡りたる

狂言

十六羅漢。又仏舎利をも拝み申したく候。

「実にく聞し召し及ばれて御参り候ふか。聊爾に拝み申す事叶はず候。但し今日彼御舎利の御出で有る日にて候。我等当番にて唯今戸を明け申さんとて。鍵を持つて罷り出で候。まづ此舎利を御拝み有つて。其後山門に登りて十六羅漢をも拝ませ申し候ふべし。此方へ御出で候へ。からくさつと御戸を開き申して候。よくく御拝み候へ。

ワキ
「あら嬉しや御供申し参り候ふべし。

ワキサシ

「實にや事として何か都の愚かなるべきなれども。殊さら靈験あらたなる。仏舎利を拝み申す事の貴さよ。是なん足疾鬼が奪ひしを。韋馱天取り返し給ひし。現住奇特の牙舎利の御相好。感涙肝に銘づるぞや。一心頂礼万徳円満釈迦如来。

地
「有難や。今も在世の心地して。く。まのあたりなる仏舎利を。拝する事のあらたさを。何に喻へ

シテサシ
ん墨染の。袖をも濡らす氣色かな。／＼。

「有難や仏在世の御時は。法の御声を耳に触れ。聞
法値遇の結縁に。一劫をも浮ぶ此身ながら。二世
安樂の心を得るに。後五の時代の今さらに。猶執
心の見仏の縁。嬉しかりける時節かな。

ワキ詞
「我仏前に觀念し。寥々とある折節に。御法を尊ぶ
声すなり。如何なる人にてましますぞ。

シテ詞
「是は此寺のあたりに住む者なるが。妙なる法の御

声を受けて。こゝに立ち寄るばかりなり。

ワキ
「よし誰とても其望み。仏舍利を拝まん為めなら
ば。同じ心ぞ我も旅人。

シテ
「来るもよそ人。

ワキ
「所もまた。

二人
「都の辺東山の。末につゞける峰なれや。

地
「月雪の。古き寺井は水澄みて。／＼。庭の松風さ
えかへり。更け行く鐘の声までも。心耳を澄ます

夜もすがら。實に聞けや峰の松。谷の水音澄み渡る。嵐や法を称ふらん。く。

地クリ

「それ仏法あれば世法有り。煩惱あれば菩提あり。仏あれば衆生もあり。善惡又不一なるべし。

シテサシ「然れば後五百歳の仏法。既に末世の折を得て。

地「西天唐土日域に。時至つて久堅の。月の都の山なみに。仏法流布のしるしとて。仏骨を納め奉り。

シテ

「實に目前の妙光の影。

地

「此御舎利に若くはなし。

クセ

「然るに仏法東漸とて。三如来四菩薩も。皆日域に地を占めて。衆生を濟度し給へり。常在靈山の秋の空。わづかに二月に臨んで魂を消し。泥洹双樹の苔の庭。遺跡を聞いて腹を断つ。有難や仏舎利の。御寺ぞ在世なりける。實にや鷲の御山も。在世のみぎんにこそ。草木も法の色を見せ。皆仏身を得たりしに。

シテ
「今は淋しく凄ましき。

地
「月ばかりこそ昔なれ。孤山の松の間には。よそ

く白毫の。秋の月を礼すとか。蒼海の波の上に。
わづかに四諦の。暁の雲を引く空の。淋しさゝぞ
な鷺の御山。それは上見ぬ方ぞかし。こゝは正に
目前の。仏舍利を拝する。御寺ぞ貴かりける。
ワキ詞
「不思議やな俄に晴れたる空かき曇り。堂前にかゝ
やく稻光り。こはそもいかなる事やらん。

シテ詞
「今は何をか包むべき。其いにしへの疾鬼が執心。

猶此舍利に望みあり。ゆるし給へや御僧達。

ワキ
「こはそもそも見れば不思議やな。面色変はり鬼となり
て。

シテ詞
「舍利殿に臨み昔の如く。

ワキ
「金冠を見せ。

シテ
「宝座をなして。

地
「梅檀沈瑞香。梅檀沈瑞香の上に。立ち上る雲煙を

立てゝ。稻妻の光りに飛び紛れて。固より足疾鬼
とは。足疾き鬼なれば。舍利殿に飛び上り。く
るくくと。見る人の目を暗めて。其紛れに牙
舍利を取つて。天井を蹴破り。虚空に飛んで上る
と見えしが。行方も知らず失せにけり。く。(中入)
「そもそも是は。此寺を守護し奉る。韋駄天とは我
事なり。

詞
「こゝに足疾鬼といふ外道。在世の昔の執心残つて。

また此舍利を取つて行く。いづくまでかは遁すべ
き。其牙舍利置いて行け。

シテ
「いや叶ふまじとよ此仏舍利は。誰も望みのある物
を。

地
「欲界色界無色界。く。化天耶摩天他化自在天。
三十三天よぢのぼりて。帝釈天まで追ひ上ぐれば。
梵王天より出で逢ひ給ひて。もとの下界に追つ下
す。

シテ 「左へ行くも。

地 「右へ行くも。前後も天地も塞がりて。疾鬼は虚空
にくるくくくと。うづまひめぐるを。韋駄天立
ち寄り宝棒にて。疾鬼を大地に打ち伏せて。首を
踏まへて牙舎利はいかに。出だせや出だせと責め
られて。泣くくく舎利を指し上ぐれば。韋駄天舎
利を取り給へば。さばかり今まで足はやき鬼の。
いつしか今は足弱車の。力も尽き心も茫々と。起
き上りてこそ失せにけれ。